



# 日本植物病理学会ニュース 第110号

(2025年5月)

## 【学会活動状況】

### 1. 大会開催報告

令和7年度日本植物病理学会大会は、中四国地区の学会員38名で組織した運営委員会により、3月26日(水)～28日(金)の3日間、香川県高松市にあるサンポート高松で、コロナ禍前と同様の完全対面方式にて開催しました。大会前(3月25日(火))に開催した第5回日韓植物病理学会合同シンポジウム(日韓シンポ)に続き、大会初日の開催式では、森充隆大会副委員長の開会宣言の後、大会委員長ならびに一瀬勇規学会長の挨拶、逝去会員報告・黙とうに続き、染谷信孝庶務幹事長の進行で定時総会が開催され、総会閉会后直ちに、理事会も開催されました。続く授与式では、名誉会員(川北一人氏、夏秋啓子氏、夏秋知英氏)・永年会員(伊藤進一郎氏、諸見里善一氏、西口正通氏、田中秀平氏)の推挙と授与、学会賞・学術奨励賞・論文賞がそれぞれ授与されました。次の新体制紹介では、高橋英樹新会長および眞岡哲夫新副会長の挨拶、佐々木信光新庶務幹事長ならびに新旧幹事の紹介の後、高橋新会長の会長講演、3名の学会賞受賞者(白須賢氏、宍戸雅宏氏、吉岡

博文氏)の受賞講演が行われました。午後からは、学術奨励賞受賞者(足助聡一郎氏、湊菜未氏、佐藤有希代氏)の講演に続き、一般講演がスタートしました。初日夕方の情報交換会は、日韓シンポと日本植物病理学会大会の合同情報交換会として開催し、JRホテルクレメント高松・飛天の間にて、まずは日韓シンポ開催へのご挨拶をYong-Hwan Leeアジア植物病理学会長ならびに一瀬前学会長から頂き、学生ポスター賞の授賞式を行いました。続いて、大会開催にあたり高橋新学会長からの挨拶、露無愼二名誉会員の乾杯の音頭により、合同情報交換会は盛大に開催され、国内のみならず、日韓会員相互の交流と懇親を深める機会になりました。

今回の大会は、コロナ禍後初の完全対面方式となりました。35年ぶりの四国開催ということで、参加者数の伸び悩みを当初心配していましたが、日韓シンポの参加人数は235名、日本植物病理学会大会の参加人数は819名、合同情報交換会にも510名のご参加を頂きました。日韓シンポとの同時開催という事で、通常年とは少し違う部分もございましたが、大きな混乱もなく充実した大会となりました。



写真1 一瀬代表理事・学会長挨拶



写真2 高橋新学会長挨拶

また、今回の試みとして、発表 PPT 資料を集中管理して、発表中の投影業務を専門業者に委託しました。インターシップの導入等で、就活の様子がコロナ禍前と異なり、この時期は学生バイト人数の確保が困難であるなど、各ブロック間で共通の新課題もございます。今回の試みの成果をしっかりと引き継いで、次回以降の大会運営がスムーズに進行できるように、情報共有したいと思います。参加者数・発表演題数等、いずれもコロナ禍前の水準に完全回復しており、新旧の会長をはじめとする学会役員の皆様、座長や学生優秀発表賞の審査員をお引き受け頂いた皆様、協賛・ご協力頂いた諸団体、開催準備・運営に当たって頂いた運営委員の方々、そして大会参加者の皆様のご支援・ご協力の賜物と存じます。改めて、心より厚く御礼申し上げます。

(大会委員長 秋光和也)

## 2. 研究会・談話会等開催報告

### (1) 第3回ダイバーシティ推進セミナー

令和6年度はダイバーシティ推進の一環として、特に、会員の女性比率を上昇させるための取り組みについて検討してきました。日本植物病理学会会員の男女比の推移は学会ホームページのダイバーシティ推進委員会サイトに掲載されています。これによると、近年は会員およそ1700人のうち、女性比率は約20%で推移していますが、その一方で、学生会員では女性比率は40~45%となっています。この40%という高い女性比率は、卒業後に緩やかに減少し、その後35歳を境に20%以下に下がっています。時代の違い等、様々な要因が関与していると想像されますが、考えられる2つの原因として、(1) 学生時代に植物病理学会に入会した女性学生会員が、大学卒業後に植物病理学以外の分野に就職している、(2) 卒業後に植物病理学分野に留まった女性一般会員の多くが、その後退会している、ということが見えたのではないかと私たちは考えました。このうち、(1) の就職を機に植物病理学分野を離れることに着目し、第3回ダイバーシティ推進セミナーを企画するに至りました。

高松大会初日の2025(令和7)年3月26日12:15~13:15にランチオンセミナー形式で第3回ダイバーシティ推進セミナーを開催しました。「あなたの道を見つける~若手研究者が語る植物病理学分野の多様な選択肢~」と題し、これから就職する学生会員を対象とし、研究職を選択肢として考えていただく機会を提供することを目的としました。セミナーでは、2025年度学会長 高橋英樹氏よりダイバーシティ推進に対する激励として、年に1度のセミナー開催によりダイバーシティを考えることには意義があり、今後



写真 パネラーによるトークの一場面

もセミナーを継続するようにとのお言葉を頂きました。セミナーのパネラーについては、現在学会で活躍している様々な方面の研究者として、理化学研究所の大野恵梨佳氏、香川県農業試験場の片山貴博氏、三井化学クロップ&ライフソリューション株式会社の小寺俊丞氏、農研機構植物防疫研究部門の竹山さわな氏、大阪公立大学の津島綾子氏にご登壇いただきました。パネラーの方々からは、現在の職業を選ぶに至ったターニングポイント、選択にあたり悩んだこと、現在の仕事の面白さややりがい、ワークライフバランスの工夫についてご説明いただきました。それぞれの方の等身大で現実的な悩みについてもお話いただきましたので、会場からは学生会員と思われる方々からの質問が続き、閉会後もパネラーと話し込んでいる姿が見られました。

セミナー参加者は、昨年よりやや少ない95名でした。昼休みの時間帯に開催するランチオンセミナーということもあり、今後は、会場周辺の飲食店の多さや会場の広さを考慮してセミナー参加者数を予想する等の工夫が必要かと思われました。セミナー後のアンケートによると、会場の世代別参加者は21~25歳37.0%、26~30歳24.0%、31~40歳6.5%、41~50歳13.0%、51~60歳15.2%、61~65歳4.3%、会員区分別参加者は、一般会員54.4%、学生会員39.1%、学部生会員6.5%であることがわかりました。学部生から大学院生までの多くの学生会員と、様々な世代の一般会員の方々に参加していただくことができ、委員一同たいへん感謝しております。今後も多様性への理解と配慮を深める取り組みを通じて、より充実した学会活動の実現に努めてまいります。(中馬いづみ)

### (2) 編集委員会主催 Disease note セミナー

日本植物病理学会編集委員会主催のDisease noteセミナーを令和7年度日本植物病理学会大会2日目の2025年



写真 セミナーの様子

3月27日にサンポート高松にて開催しました。本セミナーは、日本植物病理学会の英文誌である *Journal of General Plant Pathology* (JGPP) への若手研究者からの投稿を増やす取り組みとして企画したものです。糸状菌・細菌・ウイルスの分類に関して病名委員として活躍されている3名の方を講師にお招きして、新病害発生報告である“Disease note”について、執筆に必要なデータやスムーズに受理に至るためのポイントについて解説していただきました。

開会の挨拶として主催者代表の磯貝雅道編集委員長（岩手大学）より、JGPPの現状と本セミナー開催の趣旨について説明していただきました。最初の講演では、病名委員長である佐藤衛氏（農研機構・遺伝資源研究センター）より、糸状菌病の Disease note に必要な病徴写真や形態観察などの具体的なデータの取得方法や、病名記録の検索方法について分かりやすく解説していただきました。2題目の講演では、病名委員と編集委員を兼任している達瑞枝氏（農研機構・東北農業研究センター）より、細菌病の Disease note に必要なデータの取得法から論文の構成、さらに執筆にあたっての注意点までを解説していただきました。3題目の講演では、病名委員と編集副委員長を兼任されている藤晋一氏（秋田県立大学）より、ウイルス病の Disease note に必要なデータの理想と現実について具体的に解説していただきました。最後の質疑応答では、予定時間を超え、より踏み込んだ議論が活発に行われました。

本セミナーの開催は初の試みであったため、参加者がどれくらい集まるか不安でしたが、蓋を開けてみると定員45名の部屋に64名が集い、急遽椅子を追加で用意するほどの大盛況でした。また、セミナー後のアンケートによると、参加者は国や地方の公設試験場の20代から30代の若

手研究者が大半であり、学生の参加もありました。参加者はJGPPへの投稿に意欲的で、本セミナーが参考になったと回答いただきました。そして、今回のようなセミナーを継続して開催してほしいという要望も多く寄せられました。これを機会に、より多くの研究者からのJGPPへの投稿が増えることを期待しております。

最後に本セミナーの開催にあたり、会場の準備をしていただいた大会事務局の方々と講師の先生方にお世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

（八重樫元）

### (3) 技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナー

令和7年度技術士試験対策セミナーは、日本植物病理学会大会会場（サンポート高松）にて大会第2日目（3月27日）の午後、当学会技術士対応委員会主催のもと開催された。本セミナーの準備と開催に当たっては、大会委員長をはじめとする大会運営委員会の皆様の特段のご配慮をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げます。

第一部の第一次試験対策セミナーでは、まず長谷部元宏氏（日本農薬株式会社）が、技術士制度と第一次試験（農業部門）について概略を説明されるとともに、民間企業に在籍される中での技術士取得の意義などを話していただいた。次いで、大阪公立大学に在学中の秋元佳也、桂恵輔、梅井貴史、川澄留佳の4氏が、第一次試験受験のきっかけと勉強法についてそれぞれ具体的にユーモアも交え説明していただいた。第一部の最後には栢森美如氏（道総研 上川農業試験場）の司会で質疑応答・ディスカッションが行われ、勉強にかけた具体的な時間など質問があり、盛んな議論がなされた。第二部の第二次試験対策セミナーでは、まず栢森氏が技術士試験方法の変遷や、植物保護科目合格者の変化等について紹介され、いま合格のために何が求められるか、試験にいかに取り組むのか説明された。続いて、昨年度の合格者である折原紀子氏（神奈川県農業技術センター）が、ノートを作成しそれを音読、録音し繰り返し聴く勉強法を紹介され、出願書類の作成、筆記試験や口頭試験に向けた具体的な取り組みについて丁寧に説明された。最後に、栢森氏、折原氏を中心に質疑応答・ディスカッションが行われた。全体での話し合いが終わった後にも、個別に活発な話し合いが持たれた。第一部、第二部を通し、企業、大学、試験研究機関等から43名の参加をいただき、盛況のうちにセミナーを終了した。なお、本セミナーで配布した資料を、これまでに開催したセミナーの資料とともに会員限定で配布している。日本植物病理学会のホームページの「技術士」の項を参照しお申込みいただきたい。

本セミナーは、オンライン開催を含め通算12回目の開催となった。栢森氏が、受験された後に情報提供を呼びかけられていたように、本セミナーを受講した方が技術士試験に合格し、本セミナーに情報提供いただき講演いただくといった好循環を今後も続けていきたい。技術士試験合格者は親密にコミュニケーション取り合っており、今後も一体となって受験促進と資格活用に取り組む所存である。末筆となったが、参加者並びに講演者に対し、主催者一同心よりお礼を申し上げる。(濱本 宏)

#### (4) 第8回植物病理を紡ぐ会

第8回植物病理を紡ぐ会は、令和7年3月28日に高松にて開催された(写真1)。前身である『全国「若手の会」を目指して』勉強会より数えて10回目となった今回は、大学、公的研究機関、企業から83名(学生33名)の参加を得て、平成31年の第3回植物病理を紡ぐ会以来、実に6年ぶりの対面での開催となった。

「植物病理を紡ぐ会」は、学生、若手・中堅会員を中心に、①「現場から実験室まで」、「基礎から応用まで」という植物病理が扱う対象の広さ、面白さに触れてもらうこと、②そのような植物病理学を学んだ人間の人生・将来の選択肢を知ってもらうこと、③業種や分野の垣根を超えた植物病理に関わる人間の異分野交流を目的として、植物病理の「分野」と「人」を紡ぐための場として企画された。本会では、植物病理の幅広い分野からの講師をお招きし、現在の研究や職務だけでなく、学生時代から今へと至る「半生史」をご紹介いただくこととしている。現在、各方面で活躍されている方々が人生の岐路でどのようなことを考え、どのような選択をして今に至るのか?という、キャリアの裏側に触れる機会は、若手・中堅研究者にとって貴重な経験になると考えている。

そのような趣旨のもと、今回は、佐藤有希代氏(ケルン大学)による「植物病理とウイルスと宿主の多様な関係」、畔柳康典氏(岡山県農林水産総合センター農業研究所、岡山県病害虫防除所)による「岡山県職員の植物病理に関わる仕事と私 ～生産現場の問題解決に向けて～」、さらに、橋本将典氏(静岡大学)による「植物ウイルスから根圏微生物叢に至るまでに考えてきたこと」という3題の講演をお願いした。まず、佐藤氏からは、東北大学から岡山大学資源植物科学研究所、ケルン大学とアカデミアでキャリアを進めていく中で、何に興味を持ち、なぜ留学を選択することにしたのか、自身の経験を話題提供いただいた。特に、ウイルス-宿主相互作用研究の中で、ウイルスが宿主の遺伝子発現やトランスポゾン調節する機構を見出し、トラ



写真1 参加者の集合写真

ンスポゾンへの興味から、真菌のゲノミクス研究の修行をするためドイツに渡った経緯は、海外留学を目指す学生にとって大変参考になる内容であった。さらに、病原菌の進化、遺伝子の水平伝播を担う巨大トランスポゾン“Starship”に関する世界最先端の研究内容をご紹介いただいた。畔柳氏からは、岡山県農林水産総合センター農業研究所と岡山県病害虫防除所にて、県の農業現場における重要課題である病害虫被害への対策業務が多いこと、植物病理学を専門として学んだ若手人材が求められていることが紹介された。また、農業行政業務としてドローンを活用したスマート農業が推進されていることなど、近年の職務の傾向もご紹介いただいた。さらに、研究室で実施する職務として、気象予報に基づく病害虫の発生予察と生産者への情報提供、農作物の生育障害の診断と対策指導、生産現場からのニーズに応じた防除薬剤の実用化試験など具体的な内容を紹介いただき、農業現場に寄り添う植物病理学のあり方を考える機会となった。続いて橋本氏からは、学生時代の研究過程で「研究の独自性が足りないのではないか?」という迷いが生じたこと、人との繋がりを大事にし、植物医科学の社会実装に取り組んだ経緯や、ウイルスの細胞移行メカニズムの解明に繋がった経緯など、人生の岐路で何を考え、何を選択したのかをご紹介いただいた。さらには、最近の根圏微生物叢の制御に関する研究についても紹介され、宿主、微生物、環境要因から成る植物病の成り立ちを改めて考える機会となった。座右の銘として紹介された「自分の強みを活かして取り組めばいい」、「思いついた事をとりあえずやってみる、やらない理由はない」、「先人への感謝を忘れず恩送りをする」といった言葉は印象的で、若手研究者のロールモデルとなるであろう。さらに、一時代を築かれた経験豊かな講師から「半生史」を語っていただきたい、という声から始めた特別講演として、今回は土佐幸雄氏(神戸大学)に「境界領域“pathogenetics”を亀が行く」と題し、ご講演いただいた(写真2)。オオムギ-オオムギうどんこ病菌相互作用を対象とした卒論テーマを進める中で、データが出ないことをきっかけに始めた実験から、

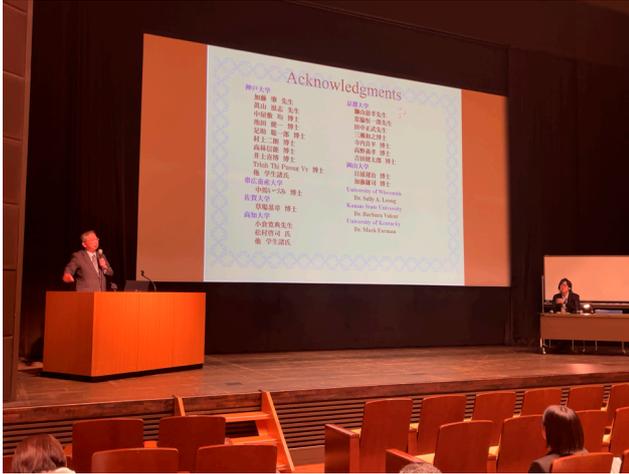


写真2 土佐氏による講演の様子

「分化型－属間特異性」で見られる細胞応答が、宿主・非宿主レベルの特異性ではなく「レース－品種間特異性」で見られる過敏反応であることを見出し、分化型－属間特異性を説明する gene-for-gene theory の概念創出に繋がった経緯をご紹介いただいた。さらに、分子生物学への興味から始めたいもち病研究として、パンデミックを引き起こしたコムギもち病菌の起源や、非病原力遺伝子の機能欠失によって宿主ジャンプが起こるという病原菌進化モデルに関する近年の植物病理学分野の大きな発見をご紹介いただいた。本講演を通じて「論文を鵜呑みにしてはいけない、とにかく愚直に遊んでみることに」、「仮説に合わない結果を得たら喜ぼう、ブレイクスルーの入り口である」といった言葉を伝えられ、若手研究者への貴重なメッセージであると感じた。

以上のように、限られた時間ではあったが、異なるキャリアステージの講演者の研究内容と研究への熱意を、参加者一同共有させていただいた。勉強会終了後は、46名の参加者が対面での懇親会に参加し、引き続き活発な議論・情報交換が行われた。末筆ではあるが、多忙な時期にも関わらず講演をお引き受けいただいた講演者の方々、令和7年度日本植物病理学会大会終了後にお集まりいただいた参加者の方々に、世話人一同厚く御礼申し上げます。

(安達広明)

#### (5) 第24回植物病原菌類談話会

第24回植物病原菌類談話会は、令和7年度日本植物病理学会大会終了後の令和7年3月28日の14:00～16:40にかけて、サンポート高松にて開催された。大学、公立の試験研究機関、公益財団法人、種苗会社及び農薬メーカーな

ど、学生・研究者79名の参加があった。

今回の談話会は、梶谷裕二氏（福岡県農林業総合試験場）をコーディネーターに、「*Diaporthe* 属菌に関する最近の話題について－ところで、あの菌の所属は？－」をテーマとして講演・質疑応答、総合討論を行った。まず初めに西八束氏（鹿児島県農業開発総合センター）が「サツマイモ基腐病の発生生態と最新の防除対策」と題して、病原菌量は時間経過とともに土壤中で下がっても、罹病植物体残渣中では維持されているなどの重要なポイントを含め、防除対策について解説した。続いて、松元賢氏（九州大学）が「アスパラガスの病害対策：世界初の茎枯病抵抗性品種「あすたまJ」の育成研究」として、日本固有野生種で茎枯病の抵抗性を有するハマタマボウキに着目したアスパラガス品種の育成の経緯、また開発した茎枯病抵抗性品種あすたまJの性質などについて紹介した。さらに、荻島綾華氏（神奈川県農業技術センター）からは「日本産植物寄生性ディアポルテ目菌類の病原性と分類－現場を経て、現在思うこと～」として近年のディアポルテ目菌類の分類の変遷、また、進化の過程で木本植物から草本植物へ宿主転換したと推定されることなどの説明があった。全ての講演後、改めて総合討論を行ったうえで会を終了した。香川大学の大会事務局の方々に、本談話会の開催準備の段階から多大なご支援を賜ったことを深く感謝します。次回の本談話会は菌種分類の概念から分離・同定までをテーマに来春の日本植物病理学会大会に合わせて対面での開催を予定している。

(須賀晴久)

#### (6) 第16回植物ウイルス病研究会

令和7年度日本植物病理学会大会は、2025年3月26日から28日まで高松市で盛大に行われ、その前日の25日には第5回日韓植物病理学会合同シンポジウムが開催された。大会翌日の3月29日から30日にかけての2日間、倉敷で第16回植物ウイルス病研究会（16th PSJ Plant Virus Disease Workshop: Interface between plant and fungal viruses III）<<https://www.rib.okayama-u.ac.jp/pmiws/>>が開催された。通常、大会と同じ場所で開かれるこの会であるが、今年度は講演者、座長、聴衆の皆様には高松から倉敷までの移動（ローカル線）で御足労をおかけした。サブタイトルからお分かり頂けるかと思うが、植物ウイルスと菌類ウイルスの接点というテーマで3回目の開催となる。開催場所も前回と同じ倉敷市立美術館講堂である。前回、前々回と異なる点は、100名を超える参加者の中で外国人参加者が大幅に増え、40名を超えた。彼らの出身国も10ヵ国を超えた。また、菌類ウイルス関連の講演も大幅に増えた。

講演者 20 名の中で外国人招待講演者 7 名, 日本人招待講演者 2 名, 外国人一般講演者 6 名, 日本人一般講演者 5 名と国際色豊かであった。ポスター発表も合計 11 題 (外国人による発表 9 題, 日本人による発表 2 題) を数えた。初日の 3 月 29 日は, Raul ANDINO 博士 (University of California at San Francisco, 米国) による基調講演に始まり, Marco INCARBONE 博士 (Max Planck Institute of Molecular Plant Physiology, ドイツ), Jiatao XIE 博士 (Huazhong Agricultural University, 中国), Ying Wen HUANG 博士 (National Chung Hsing University, 台湾), 山次康幸 博士 (東京大学), 石橋和大 博士 (農研機構), 佐々木信光 博士 (東京農工大), Chi-Ping CHENG 博士 (Tzu Chi University, 台湾), Peter NAGY 博士 (University of Kentucky, 米国), 森山裕充 博士 (東京農工大), Yukiyo SATO 博士 (University of Koeln, ドイツ), Hsin-Hung YEH 博士 (ABRC, Academia Sinica, 台湾) による招待講演で終えた。3 月 30 日の 2 日目は, Liying SUN 博士 (Northwest A&F University, 中国) による一般講演に始まり, Rosa LOZANO-DURAN 博士 (Eberhard Karls University, ドイツ), Aurélie RAKOTONDRAFARA 博士 (University of Wisconsin-Madison, 米国), 小松健 博士 (東京農工大), Ching-Hsiu TSAI 博士 (National Chung Hsing University, 台湾), Vicente PALLAS 博士 (IBMCP, CSIC-UPV, スペイン), Marion CLAVEL 博士 (Max Planck Institute of Molecular Plant Physiology, ドイツ), Ida Bagus ANDIKA 博士 (Northwest A&F University, 中国) による招待講演で終えた。どなたも格調高い講演をされた。今回議論されたのは, 主にウイルス学の基礎研究の最新の成果である。ウイルスに対する昆虫宿主の防御機構 (ANDINO 博士), 植物でのウイルス垂直伝染を抑える防御機構 (INCARBONE 博士), 菌類ウイルスの水平伝搬を促進する機構 (XIE 博士), 謎めいた菌類, 植物エンドルナウイルス (森山 博士), 植物病原糸状菌の病原力まで支配するトランスポゾン (SATO 博士), 植物病原糸状菌の病徴・病原力を支配する DNA ウイルス由来のタンパク質 (RAKOTONDRAFARA 博士), 植物ウイルスの細胞間移行をめぐるウイルスと宿主の攻防 (佐々木 博士, CHENG 博士), オートファジーを巡るウイルスと宿主の攻防 (ANDIKA 博士, CLAVEL 博士), RNA ウイルスに対する宿主防御機構 (山次 博士, YEH 博士), m6A による RNA ウイルス複製への負の影響 (PALLAS 博士), 葉緑体内 RNA 編集によるポテックスウイルスの複製阻害 (TSAI 博士), RNA ウイルスベクターを用いたゲノム編集技術の開発 (HUANG 博士, 石橋 博士), RNA ウイルス複製に関わる宿主因子の解析・複合体の可視化 (石橋 博士, NAGY 博士, 小松 博士), 界を跨ぐ



写真 参加者の集合写真

ウイルス感染 (SUN 博士), 媒介昆虫, 宿主植物を操るジェミニウイルス (LOZANO-DURAN 博士) などである。ポスター発表でも, 筆者には少々難解ではあるが, 興味深いウイルス社会学の「多数決型意思決定」についての宮下博士による発表, あるいは田原 博士による植物 (トウガラシ) 持続感染性新規 RNA についての発表が行われた。詳しい発表内容は, 第 16 回植物ウイルス病研究会レポート (学会事務局から入手可能, byori@juno.ocn.ne.jp) を参照されたい。ワークショップのもう一つの大きな目的は, 最新の研究成果を共有, 関連情報を交換するという純粋に科学的なものである。すなわち, 質の高い講演を聴き, 活発な議論を通じてそれらの話題についての理解を深めることである。本ワークショップでは, どの講演でも質疑応答が活発に行われ, その目的が充分達成された。座長の中原健二 博士 (北海道大), 煉谷裕太郎 博士 (宇都宮大), 三瀬和之 博士 (京都大), 松下陽介 博士 (農研機構), 近藤秀樹 博士 (岡山大), 兵頭究 博士 (岡山大) には心より感謝申し上げる。

もう一つの大きな目的の一つは, 研究者間の親睦である。これは, 一見すぐさま研究の発展に結びつかないかもしれないが, 長い研究者生活では意外とプラスに働くことが多々ある。将来に渡り, 情報交換ができ, 共同研究者となりうる, 信頼できる人間関係 (ネットワーク) を築き上げることである。常々コミュニケーション能力を磨いておくことは, このような国際ワークショップでは極めて重要である (特に日本人研究者にとっては)。今回の情報交換会は, 歴史的建造物である新溪園 (倉敷紡績の初代社長大原孝四郎氏により明治 26 年建造された) で賑々しく行われた。

本ワークショップの開催にあたり, 日本植物病理学会, 公益財団法人大原奨農会, アルファバイオ株式会社, 倉敷市観光コンベンションビューロー, 岡山大学, 松浦善治



写真 情報交換会

博士（大阪大学）から御支援を頂いた。これらのご支援により、上記のような世界の第一線で活躍されている豪華な顔ぶれのウイルス学者をお招きすることができた。

この機会を利用し、第6回国際マイコウイルスシンポジウム（6th International Mycovirus Symposium, IMS VI）の紹介をさせて頂きたい。IMS VIがフィンランドのヘルシンキで6月11～13日に開催される予定である<<https://www.helsinki.fi/en/conferences/6th-international-mycovirus-symposium>>。主催者は、今回は来日が叶わなかったEeva J. VAINIOD博士（Natural Resources Institute Finland, Luke）である。新しい情報が入手でき次第、随時、岡山大学植物研植物／微生物相互作用グループのホームページ（<http://www.rib.okayama-u.ac.jp/pmi/index-j.html>）でアップするので、注目あれ。

最後に、講演者、座長の皆様、倉敷までお越し頂いた聴衆の皆様、本会の運営にあたってくれた岡山大学資源植物科学研究所・植物／微生物相互作用グループ（PMI）の諸氏に感謝申し上げます。（鈴木信弘）

#### (7) 農研機構 植物防疫研究部門 病害虫セミナー

農研機構主催の病害虫セミナーは、令和7年度日本植物病理学会大会終了後にサンポート高松の会議室で、「省力的なIPMの実践を支援する水稲病害虫の発生予測システムの開発と利用」と題して開催された。はじめに、「水稲病害虫の発生予測システムの目的と開発状況」と題して、芦澤武人氏（農研機構 植物防疫研究部門）から、農林水産省の委託プロジェクト研究で実施中の「省力的なIPMを実現する病害虫予報技術の開発」において、18種の水稲病害虫の発生予測・薬剤散布適期連絡システム（デモ版）を作成したことが報告され、今後2年間で統合版を作成し、現地実証試験を進めることについて紹介された。次に、水

稲病害の中で、太田光祐氏（農研機構 植物防疫研究部門）からイネいもち病、イネごま葉枯病およびイネ白葉枯病の発生リスク予測システムについて、井之口曜氏（農研機構 植物防疫研究部門）からイネ紋枯病およびイネもみ枯細菌病の発生予測・薬剤散布適期連絡システムについて、芦澤武人氏（農研機構 植物防疫研究部門）からイネ稲こうじ病の発生予測・薬剤散布適期連絡システムと土壌改良資材等を利用した総合防除技術について、操作方法や今後の改良に必要な研究項目も含めて紹介された。続いて、水稲害虫について松倉啓一郎氏から水稲害虫12種（ヒメトビウンカ、トビイロウンカ、セジロウンカ、コブノメイガ、フタオビコヤガ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ツマグロヨコバイ、スクミリンゴガイ）の発生世代予測・薬剤散布適期連絡システムについて、その使い方と改良項目が説明された。次に、株式会社ビジョンテックの藤澤博司氏ならびに中村優氏から、システムの社会実装と普及に向けた取り組みについて説明され、システム（デモ版）のデモンストレーションをしていただき、今後2年間でアプリケーション18種を一体的に操作できる統合版を作成することや、現地実証試験を実施してその結果をシステム開発にフィードバックすること等について説明された。総合討論を含む質疑応答では、病害虫の発生予測アルゴリズムやシステムの試用に関する情報について交換された。最後に会場の準備等にご協力くださった香川大学望月進先生、秋光和也先生ならびに本セミナーの運営に携わった方々、そして参加していただいた聴衆の皆様にも厚くお礼申し上げます。（芦澤武人）

#### 【学会活動予定】

##### 1. 2026年度大会

日時：2026年3月26～28日

場所：摂南大学枚方キャンパス（枚方市）

事務局：摂南大学

##### 2. 部会

###### (1) 北海道部会

日時：2025年10月9～10日

場所：北海道大学（札幌市）

###### (2) 東北部会

日時：2025年9月18～19日

場所：秋田県立大学（秋田市）

###### (3) 関東部会

日時：2025年9月11～12日

場所：東京農工大学（府中市）

(4) 関西部会

日時：2025年9月18～19日

場所：京都大学（京都市）

(5) 九州部会

日時：2025年11月20～21日

場所：沖縄県立博物館（那覇市）

3. 談話会・研究会等

(1) 59回植物感染生理談話会

日時：2025年9月3～4日

場所：鳥取大学（鳥取市）

(2) 第19回植物病害診断教育プログラム

日時：2025年9月1～5日

場所：九州大学伊都キャンパス（福岡市）

(3) 令和7年度EBC研究会

日時：2025年9月16日

場所：法政大学小金井キャンパス（小金井市）

【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

久保康之氏（摂南大学学長）が、2025（令和7）年度の「日本農学賞」/「読売農学賞」を受賞されました。日本農学賞授与式・読売農学賞授与式は、第96回（2025年度）日本農学大会（2025年4月5日東京大学弥生講堂）にて行われました。授与式には、久保氏に縁のある会員がお祝いに駆け付けました。

日本農学賞は、54の学協会が加盟する日本農学会が選考し、日本の農学研究者間における最高の栄誉として毎年授与を行っており、同時に読売農学賞を推薦する形式が取られています。今回、受賞対象となった研究業績は「ウリ類炭疽病菌の付着器侵入の分子機構に関する研究」です。受賞者講演では、学生時代に発見したウリ類炭疽病菌のアルビノ変異株の研究が、付着器のメラニン合成が植物侵入に必須であることを世界で初めて証明する成果に繋がり、さらにイネいもち病菌の防除に有効なメラニン合成阻害剤の作用機構の解明や環境負荷の小さい防除薬剤開発へと研究を展開されてきたこと、また糸状菌の遺伝学的解析手法を確立されて多くのメラニン合成系遺伝子の機能を解明したこと、ウリ類炭疽病菌のゲノム解析を進めて植物病原糸状菌の研究基盤を構築されたことについてご講演されました。メラニン化した付着器の膨圧は、タイヤ圧の数十倍以上といった分かりやすい例えが印象的でした。受賞祝賀会では、受賞者代表としてご挨拶され、日本植物病理学会を含む関係者への御礼の言葉を述べられました。日本植物



写真 受賞祝賀会の様子(受賞者の久保康之氏:前列左から2人目)

病理学会としては、2023年度から3年連続で会員の受賞が続いており、本学会員の研究が学術的かつ社会的に高く評価されていることを大変喜ばしく感じています。

（染谷信孝）

【書評】

「診断ハンドブック 緑地・花壇の病害虫」（植物医科学叢書 No. 9）

編著：堀江博道・竹内浩二・近岡一郎・橋本光司

2025年1月発行

体裁：A5判，ソフトカバー，292ページ

ISBN 978-4-86518-249-1 C3645

発売元：大誠社

定価：2,750円（本体2,500円＋税10%）



樹木や草花などに発生する病害虫を診断するための図鑑で、書名にハンドブックの名が付いているようにA5サイズの小型、ページ数300弱の軽量で手軽に持ち運びできる本である。小型なので、多種多様な樹木や草花の病害虫の診断に使えるかを疑ったが、少し中を確かめただけで疑念は消えた。

表紙写真：大誠社 HP より

その理由は、この本のベースにあることが、‘はじめに’を読んで納得できた。樹木や草花などに発生する

病害虫の図鑑としてすでに、「花木・緑化鑑賞樹木の病害虫診断図鑑」(植物医科学叢書 No. 6 : 2020 年)と「花壇・緑地草木植物の病害虫診断図鑑」(植物医科学叢書 No. 7 : 2023 年)が出版されている。両図鑑は樹木や草花などに発生する病害虫を、複数枚の画像とともに診断のポイントを詳しく解説し、対処方法も示している。両図鑑とも十分すぎるほど内容は充実しているが、ページ数が 800 を超え、とても手軽に持ち運べない。野外に携行できる小型の図鑑が欲しいとの要望が多かったようである。それに応えて、野外でも利用できるようにコンパクト化したのが本書で、簡素化しているが両図鑑と基本は変わらないことから、図鑑として不足はない。

本書は、病害編と害虫編に分けられ、両編はそれぞれに合う体裁で作られている。

病害編は、多くの植物に共通する病害をまず取り上げ、そのあと樹木と草花などに分けて植物ごとに主な病害を扱う体裁となっている。病害診断には画像が肝要であるが、病害ごとに大まかな症状がわかる写真と細部の病徴がわかる近接写真とがうまく組み合わせられている。また、共通病害については病害それぞれに主な寄主植物での特徴的な病徴や病原菌の写真が載っていて、解説の理解を助ける。なお、写真には標徴や病徴の特徴について簡単な説明があるのも助かる。各病害には写真とともに、「症状」と「メモ」の項目が設けられている。「症状」の項目では病害診断に必要な標徴や病状などが、また「メモ」の項目では伝染環、発病条件など生態や防除に繋がるポイントが解説されている。「メモ」の項目の末尾には、登録農薬がある場合は「農薬登録がある」と書かれていたり、その病害に関連する共通病害がある場合は共通病害の項の該当ページが付記されていたり、その病害に関連する情報が得られるように工夫されているのもありがたい。

病害ごとの診断や防除のポイント解説は、スペースの関係で限定される。そこで、その不足を補うために、この本では個々の病害の各論の後に「病害診断および対処の実践」の編が設けられている。図鑑としてはおもしろい編集である。この編では個々の病害の解説に用いられた用語の理解を助けるために、病気や病原体の発生生態、対処の方策などを「病徴の類型および標徴」「発病の要素および伝染環」「病害の対処およびその実践」などに類型化し、それらの概要が解説されている。この解説によって本書に記載された個々の病害の理解がより深まるだけでなく、未記載の病害を診断する際に病名や病因について一定の類推や、その対処の情報を得ることも期待できる。

本書は基本となった両図鑑を工夫しながらコンパクト化

している。たとえば、両図鑑では植物ごとに病害を記載しているが、植物の種類が異なっても病名が同じもの、また病原体が 1 種あるいは近縁属種に所属するもの、例えばうどんこ病や疫病、こうやく病などの病害を本書では「共通病害」の項で取り扱い、スペースが大幅に削減できている。また、べっこうたけ病やならたけ病などの腐朽病害も本書では共通病害として取り扱っているのも工夫である。「病害診断および対処の実践」の編は、両図鑑の「診断と対処」の編を下敷きに、解説はポイントを要約し、図表は省略するとともに写真は症状(病徴)・標徴に絞ることで、内容を損なわずにスペースが削減できている。編集や解説の工夫で上手にコンパクト化されていると思った。

この本が図鑑として優れていると感心したもう一つの点は、索引の充実である。植物別の病名索引、病名別の宿主植物索引、植物名の索引、と 3 種類の索引が付いている。検索項目の該当ページの番号は斜体と立体を使い、斜体は個別病害に掲載された病名・症状名の該当ページ、立体はそれ以外のところの該当ページと分ける細かい配慮がされており、便利である。

害虫編にも触れておきたい。害虫編は病害編と異なり、この本の基本となった上記両図鑑での植物種ごとの害虫項目を変更し、害虫種ごとの直接項目で構成されている。変更の意図は両図鑑と対比することで診断力を向上させることにある。病害編とは構成は異なるが、「診断および対処の実践」の編が設けられていること、3 種類の索引が設けられていることは同じである。ハンドブックと小型にも関わらず、1 冊のなかに害虫編もあることで、野外や現場に 2 冊を持参することは避けられる。

昨今はネットで一通りの調べものができる時代になっており、ネット検索は便利である。それにもかかわらず、図鑑ブームが続いている、との新聞記事がある(日経新聞)。図鑑とネット検索の違いは、ネット検索が客体的・受動的に集まってきた情報であるのに対して、図鑑の方は主体的・能動的に集めた情報であり、図鑑の良さは著者(编者)が集めた情報と意図が使い手に向けたメッセージとして伝わることにある。ネット検索にはない、予期せぬ情報に出会う面白さや解説の魅力などのアナログ感が図鑑ブームに繋がっているのかもしれない、と思うとともに、本書の「はじめに」で『図鑑ですが「読み応えもある」』と書かれている意味がわかった気がする。

野外や現場で、樹木や草花などの異常を診断し、その対処の仕方の基本を知りたい、あるいはその必要がある場合は少なくない。日本植物防疫協会が開講している植物防疫研修会には、植物防疫に関連する仕事に携わる技術者や研

究者、農薬販売者、緑化・造園関係者等々の多様な職業の方が受講している。そのような仕事に本書が役立つ図鑑であることに疑う余地はないが、仕事以外に植物愛好家にも本書は読み応え、使い甲斐があると思う。多くの方に本書をお薦めする。（日本植物病理学会名誉会員 高橋賢司）

#### 【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしく願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

守川俊幸，松下陽介，佐々木信光，埋橋志穂美

---

#### 編集後記

学会ニュース第110号をお届けします。本号では、香川県高松市で開催されました日韓シンポジウムと本大会、また大会関連セミナーや研究会等の活動報告を掲載いたしました。いずれのイベントも多くの方々が参加され大盛況であったようです。

久保康之氏（摂南大学学長）が「日本農学賞」/「読売農学賞」を受賞されました。本学会会員の受賞は一昨年度の土佐幸雄氏、昨年度の有江力氏に続き、3年連続となります。誠におめでとうございます。

また、本年1月に出版された堀江博道氏らによる編書「診断ハンドブック 緑地・花壇の病害虫」について、名誉会員の高橋賢司氏にご推薦いただきました。本書の良さを大変わかりやすく解説していただきました。皆様のお手元においてご活用いただければと思います。

今年度の学会ニュースは上記の学会ニュース編集委員で編集を行います。どうぞよろしく願いいたします。

（守川俊幸）

---